

日韓神学シンポジウム2014 「いのちの尊厳の確立」セッション II 報告（主催：聖学院大学 第4回日韓神学者学術会議）

著者	佐野 正子
雑誌名	聖学院大学総合研究所Newsletter
巻	Vol.24
号	No.2
ページ	26-27
URL	http://id.nii.ac.jp/1477/00002768/

Title	日韓神学シンポジウム 2014 「いのちの尊厳の確立」セッション I I 報告（主催：聖学院大学 第4回日韓神学者学術会議）
Author(s)	佐野，正子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.24No.2, 2015.1 :26-27
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5245
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

主催：聖学院大学 第4回日韓神学者学術会議
 日韓神学シンポジウム2014
 「いのちの尊厳の確立」セッションII 報告

セッションIに引き続きセッションIIでは、窪寺俊之教授の司会のもと、鄭鎬碩特任講師の通訳により、朴成奎（パク・ソンギユ）長老会神学大学校助教授が、「生命の危機的時代にいのちの尊厳を確立するための神学的対案の模索」と題して講演を行った。講演後、姜尚中学長および阿久戸光晴理事長によるコメントと質疑応答がなされた。

1. 講演要旨

まず、現代社会において、いのちの尊厳は様々な要素によって脅かされていることが指摘され、いのちの尊厳が毀損される諸要素の分析がなされた。すなわち、今日人間の物欲や権力欲により大量虐殺や殺傷が繰り返されていること、環境や生態系の破壊によりもたらされた自然災害による甚大な人命被害を我々はたびたび経験していること、また技術・機械文明の中で人間が群衆へと転落し、「顔なき大衆的人間」となりさがり、機械の部品のように扱われ、人間の尊厳性と主体性が失われていること、さらに生命工学や遺伝子工学の分野において、人間のいのちが手段化される危険性があることなどが指摘された。

次に、いのちの尊厳についての聖書的意味が考察された。旧約聖書においては、いのちは創造主である神の賜物であり、「産み、増え、地に満ちる」（創世記1:28）ことが願われ、いのちは肯定的に評価されている。いのちは一つの関係概念であり、神とのつながり、社会とのつながりの中で生命共同体として捉えられるべきものであり、神と離れることにより、あるいは孤独に陥ることにより、肉体的な死以前に、人はすでに「死せる者」となる。さらに新約聖書のいのち理解は、救済論的な次元からキリスト論を中心として展開され、キリストの復活は真のいのちへと向かう道を開くことになる。いのちの主は神であるという聖書のいのち理

解に立つならば、先に指摘されたいのちに対する利己的理解や態度は不可能なものとなると主張された。

さらに、以上の考察をふまえて、「いのちの尊厳を確立するための神学的対案」が提起された。すなわち、神学的対案として、いのちの主についての認識と、いのちそれ自体についての認識、そしていのちに対する畏敬の念が挙げられた。神の世界では人間の生と死のすべてが神の統治下にあると捉えられている。しばしば自分に与えられたいのちは自分のものであり、自分勝手に取り扱うことができると考えがちであるが、それは誤解であり錯覚に過ぎない。人間のいのちは創造主に由来するものであるがゆえに、いのちに対する利己的無関心や利己的欲望についての神学的解答は、いのちへの畏敬の念を持つことにあるとまとめられた。

最後に、神は生きている者の主であると共に、死せる者の神でもあり、人命被害により愛する者を失い、苦しみと挫折の中に置かれている人々にとっても、神の永遠のいのちに関する認識は、真の慰めと希望の力となることであろうと結ばれた。

2. 姜先生および阿久戸先生のコメントと質疑応答

姜先生は朴先生の講演の内容に全面的に賛同を表した上で、人間のいのちの尊厳を毀損する二つの問題に焦点をあて、一つの点は我々の生活が資本主義の中で道具化・手段化されていること、もう一つの点は「国家」が世俗的な宗教として言わば神となっていることを挙げた。そして教会があるべき我々の目ざす社会のあり方を真の意味で先取りして現しているかどうか、またこれらの問題に対して信仰的・神学的な対応はいかなるものになるのか関心を示された。

それに対して、朴先生は姜先生のコメントを神

学の立場に対して政治学の立場からの補完として捉え、神学の立場としては、これらの問題に立ち向かうためには、神によって創造されキリストによって回復された新しいいのちに注目することが重要であると応答された。

次に阿久戸先生は、神の救済計画から世界の無秩序をどう受け止めるかという朴先生の視点に大きな示唆を与えられたと評し、東日本大震災の際に世界中の国々から援助の手が差しのべられ苦しみが共有されたことを神の救済計画と関連づけて、神が様々な助け手を起こしてくださることに言及された。そして最も小さな者にキリストを見出していくという視点に立つ時に、人権に代わる有効な手段として、人間のいのちへの畏敬の念が不可欠なものとなることを指摘された。

阿久戸先生のコメントに対して朴先生は、どこを出発点として物事を捉えるかという始まり方が重要であり、人間のいのちの問題は、すべての前提である神の救済計画から出発しなければならぬことを強調された。

以上のように、フロアから出された多くの質問に答える時間が足りなくなるほど、白熱したシンポジウムとなった。東日本大震災や福島原発事故、また旅客船セウォール号の惨事などを踏まえて、いのちの尊厳を脅かす深刻な諸問題を抱える今日、まさにいのちの尊厳を確立することを目指していくことは重要かつ必要な事柄であるという共通認識をもって会議は閉じられた。日韓神学者学術会議として、いのちの尊厳に関する問題を共に考え議論したことは時宜適切なものであったと思われ、今後の継続した取り組みが期待される。



上段：会場風景
左下：朴成奎助教授（講演者）
右下：阿久戸光晴理事長（コメンテーター）

（文責：佐野正子 [さの・まさこ] 聖学院大学人間福祉学部こども心理学科教授）